

## 赤羽 潔教授へ 送別のことば

社会福祉学部教授 藤田 久美

### <感謝の気持ちをこめて>

本学の桜畠キャンパスの景色はすっかり冬色になっている。次の季節の準備のために桜の木も銀杏や紅葉も冬の寒さにじっと耐えているようにも見える。次の春を迎える時、赤羽教授は、長年勤務された本学をご退職される。目を閉じると、明るくエネルギーが満ち溢れている赤羽教授の姿が浮かぶ。「こんにちは」「ご苦労さま」「がんばっていますね」「大丈夫ですよ」若々しくはつらつとした声はエネルギーに満ち溢れ、肯定的なメッセージは春の光のように優しく暖かい。

私事になるが、私が山口県立大学社会福祉学部に着任したのは2003年である。その頃赤羽教授は学生部長（当時）として大学運営を担っておられた。そのようなお立場であるのにもかかわらず私たちのような若い教員にも優しく声をかけていただいた。それから11年間、社会福祉学部の学生教育を共に担う立場としてご指導いただいたことを改めて振り返ると感謝の気持ちがこみ上げてくる。赤羽教授からは、大学運営や学生支援に関して大学教員として長年勤務された豊富なご経験と教育学のご専門の立場から多くのご指導をいただいていた。特に、教育実習会議が創設された2007年より、月に一回、赤羽教授と社会福祉学部教職課程生の教育支援のあり方について議論を重ねられることができた。この経験は私に多くの学びを与えた。

お世話になった赤羽教授の人生の節目となる2015年春。赤羽教授へのたくさんの感謝の気持ちをこめて、送別のことばを綴っていきたい。

### <若者のいのちと向き合った軌跡から学ぶ～共に歩み闘うということ～>

赤羽先生の多くの業績はすでに紹介されているとおりでである。代表的な業績の一つである「脳死願望の果てに18歳・苦悩する魂と向きあった31日間」（青木書店、1998年）から学んだことについて以下に綴っていく。

この書籍は、ある若者とその家族との出会いから生まれた。トップクラスの成績だった少年時代、思春期の嵐の中で彷徨いながら苦しみ、家族へその苦悩と葛藤をぶつけ、家庭内暴力、母への依存、自殺未遂を繰り返していた若者。書籍は赤羽教授がその若者の魂と向き合った31日間が克明に綴られている。共に歩み、闘った赤羽教授の教育臨床的記ともいえよう。

傷つくことを恐れ、一度抱いた劣等感が拭いきれないと絶望に近い感情を抱えていた若者。その闇の中にある一人の若者とその家族との<出会い>と<別れ>の記録は読み進めていく中で読者の心を鋭く突いていく。闇の中にいる若者に真正面から体当たりしていく赤羽教授の教育魂に寄り添ってみると、そこに教育臨床の根本的な意義や課題が浮き彫りになっていく。子どもから大人になる過程にはどんな葛藤があるのか。絶望という感情は思考にどう影響をするのか。絶望の果ては<死>なのか。大人はど

う寄り添えばいいのか。その過程は、周囲を容赦なく巻き込んでいく。家族であってもそのトンネルの中に一度入ってしまうと出口に見えない恐怖と苦しみと悲哀で全身が覆われてしまう。そのトンネルに赤羽教授は自ら身を投じ、若者の魂と対話する。決して見捨てないという、強い決意を持って、共に歩み、闘っていくのだ。その強い決意には、いくつもの教育者としての心のゆらぎを乗り越えなければいけない。まるで綱渡りのような危険も包含する。

強い脳死願望を抱き、自ら命を絶った若者とその家族と共に歩み、闘った一人の教育者。そんな大人が今の教育界に存在するだろうか。教育の場は、言うまでもなく、子どもを教え導く場である。子どもから大人になる過程は、身体だけでなく精神（こころ）も大きく揺らぎながら成長していく。他者との関係の中で傷つくことを恐れ、自分という存在を見つめていく作業はそう簡単ではない。そんな苦悩を抱えた若者がぶつかる〈壁〉を乗り越えること、〈出口の見えないトンネル〉の中で襲ってくるもの、その苦悩や葛藤を乗り越えるには、家族の力だけではなく、本人や家族を支える大人（教育者）の存在が必要だ。教育臨床に携わる者はこのメッセージをどう解釈するだろう。思春期に出現する発達課題やこころの揺れに、共に寄り添い、歩み、闘ってくれる大人の存在。そんな大人の存在が、現代社会を生きる子どもたちには必要不可欠なのではないだろうか。このようなイメージが読者の胸に広がっていくのだ。教育者だけでなく、福祉や医療等に携わる専門家、家族、子育て支援者等、子どもにかかわるすべての人と共有していききたいイメージであると思う。

書物が出版されてから16年経過した今夏、社会福祉学部が開催する学部研究会にて、再び、〈共に歩み、闘った31日間〉を支えにして新たに出会った若者との対話の軌跡について語って下さった。赤羽教授の実践から生成された理論は、教育者である私たちの心を動かした。赤羽教授が、出会った若者の〈いのち〉を救えなかった後悔と新たな出会いの中でその〈いのち〉の再生を繋いだことについて声を詰まらせながら語られた時、そこにいる皆で赤羽教授の思いに深く共感し、震えるような胸の動きに耐えながら、若者と家族から教えてもらった大切なメッセージをそれぞれの胸の中に刻んだ。そして、そのメッセージをこれから胸に抱えて生きていきたいという赤羽教授の決意にじっと耳を傾けたのだ。

赤羽教授は、今もなお、その若者の魂と向き合い、遺志を引き継ぐ形で、現代社会に生きる若者の〈いま、ここ〉にかかわっておられる。そして、きっとこれからも赤羽教授が執筆された書籍や論文等により、多くの人へ発信されていくのだろう。赤羽教授が教鞭をとられてきた「教師論」「教育福祉論」、ゼミや研究活動及び社会貢献活動で展開された「生活指導論」や「臨床学教育」から発信されてきた理論については、赤羽教授から学んだ学生や現場の教員の方々が、それぞれの場で実践に結びつけていくことで、若者の魂は永遠に引き継がれていくことだろう。

私たちは、大学教育に携わる者である。このような立場でこれからもたくさんの若者と出会っていく。私たちの使命は、赤羽教授のご退職の際に、この魂を本学の中で引き継いでいくことだと考えている。退職される年に、私たちのために語って下さった思いを無駄にはしたくない。赤羽教授から教えていただいた若者たちとの〈対話〉や〈具体的なかわり〉による信頼関係を構築する努力を保持し、もし、苦悩や葛藤で彷徨っている学生がいれば、寄り添いながら、共に歩む決意をしよう。赤羽教授の学生にかかわってこられたお姿を思い出しながら。

ひとつエピソードを挙げておきたい。本学に在籍していた学生が20歳を迎える前に、これまでなかったような苦悩を抱え、心と身体のバランスを崩し、その精神（こころ）のコントロールに困難を抱えるようになった。1年生の時、赤羽教授がチューターを担当され、その後も支援を継続された後、私のゼミに入ることになった。そして、赤羽教授と共に彼女の人生にかかわらせていただく一人となったのだ。出会ったころの彼女はコントロールできない自分のこころに戸惑い、憤りを感じていた。そんな中でも、

大学で勉強したい気持ちを持ち続けていたが、そう思うほど、こころとからだのバランスが崩れ、自責観念に苦しんだ。私は、その苦しみを分かち合うために赤羽教授からご助言やご指導いただきながら、彼女と＜対話＞する時間を重ねた。彼女の家族ともやはり＜対話＞し、共に悩み、考えた。

結果、彼女は大学を退学するという結論に至った。最後に見送った桜島のキャンパスは、今と同じような春を迎える前の冬の景色だった。車の中から会釈する彼女と両親の姿を見送りながら、彼女を卒業まで支援できなかった後悔とこれから家族と共に乗り越えてほしい気持ちとが交錯した。赤羽教授は、そんな私の気持ちに寄り添い、励ましてくれた。そして、この決断がまた新たな彼女の人生を切り開くことができるスタートラインになるだろうと私に諭した。彼女が苦しい中を生き抜くためにはもう少し時間がかかるということと、その時間を大切にすれば、幸せな未来が必ずあると語ってくれたのだ。赤羽教授の「心配しなくても、大丈夫」という言葉が春の光のように暖かで、私の心にぬくもりをくれた。

彼女は、退学後、心の病気と闘い続けた。家族も彼女と共に歩み、闘った。その様子については、退学後も、赤羽教授と私に定期的に知らせてくれている。闘病生活も数年経った頃、県外から電車を乗り継ぎ、大学に遊びに来てくれた。赤羽教授とは、研究室だけでなく、山口のまちを散歩しながら、たくさんの＜対話＞を積み重ねたようである。彼女は「赤羽先生と話す元気があるんです。」と明るい笑顔で私に教えてくれた。赤羽教授のはつらつとした声、優しい笑顔、ジョークの混じったトークは、人の気持ちを肯定的にできる魔法を持っているのかもしれない。

「心配しなくても大丈夫」と。やはり春の光のように暖かく、生きる希望や勇気が自然に湧いてくるのだ。

数か月前も彼女は大学に遊びに来てくれた。退学してから10年経った今、新たな目標を得てそれに向かって頑張っているという。心の奥底からの喜びが伝わり、身体からたくさんのエネルギーが満ち溢れているように感じた。笑顔はこれまで見たことのないような輝きだった。赤羽先生との出会いがあったからこそ、彼女の＜精神（こころ）＞が輝き、未来に向かう力を醸成できたのではないだろうかと心から思った。この事を思い出すだけで、私自身も春の暖かいひだまりの中に包まれているような感覚になる。

※このエピソードを記述することは本人と家族には了解を得ている。

### ＜おわりに～教えていただいたことを胸に～＞

私たちは生きる中で何度春を迎えるのだろうか。そのめぐる季節の中で、2015年の春は赤羽教授にとって節目の春になる。桜の蕾が春の温かさを感じて緩む時、私たちは寂しい気持ちをおさえ、赤羽教授のこれまでのご功績を労い、教えていただいたことに感謝しながら、この桜島のキャンパスで見送ることになるだろう。

さて、私たちは赤羽教授から学んだことをどうこれからつなげていけばよいだろうか。

毎年春になると、福祉を学びたいという志を持った学生を社会福祉学部を迎える。この若者たちの未来に向かう力を支えるために、赤羽先生から教えていただいた事を大切にしよう。学生たちの4年間の学びと人間的成長を、社会福祉学部の仲間と共に支えていこう。そして、もし、その過程で、困難な状態にある学生に出会ったら、真摯に向き合い、生きる希望を与えられる教員になろう。赤羽教授から教えていただいたことを胸に。

最後になりましたが、これからの赤羽教授の益々のご活躍とこれからの人生のご多幸を祈念いたします。

赤羽先生、ありがとうございました。これからも私たちが春の光のように見守っててください。

